

底が突き抜けた」時代の歩き方 513

メディアは自身の今の姿をどこまで見つめることができるのか

『この時代に想う テロへの眼差し』の序（「パリにて、2002年1月」付）で、スーザン・ソntagは「作家であること」についてこう書いている。

《私も、なにごとかを語る声を愛する者だが、なにごとかを書く声のほうが好きだ。語る声は、行動を訴えかける方向へと、引きずられがちだ。作家　もちろんこの言葉は、たんに本を出す人という意味ではなく、文学という事業に取り組んでいる人を指して使っている　は活動家ではない。活動家であってはならない。解決を追求すること、そのため必然的にものごとを単純化することは、活動家の仕事だ。つねに複合的で曖昧な現実をまっとうに扱うのが作家、それもすぐれた作家の仕事である。常套的な言辭や単純化と闘うのが作家の仕事だ。》

内田樹と彼に同調する加藤典洋が、《戦場に来ないで戦争についてあれこれ討論する知識人に「怒りを禁じ得ない」ソntagの感覚》についてあげつらうとき、彼女が作家は《活動家であってはならない》とか、《つねに複合的で曖昧な現実をまっとうに扱》い、《常套的な言辭や単純化と闘うのが作家の仕事だ》と力説しているのを、彼らはどう受けとめるのだろう。彼女がサラエヴォに行くのは活動家としてではけっしてなく、劇作家としてであることをみずに、《常套的な言辭》を投げつけ、《ものごとを単純化する》思考パターンに陥っているのに対して、ソntagは彼らのような知識人と一人の作家として闘っているということになるのではないか。彼女のいう「作家の仕事」とは、ジャーナリストにも当てはまると思われる。ジャーナリズムもまた、《複合的で曖昧な現実》に対峙しつづけなくてはならないし、あらゆる「単純化」の傾向と闘わなくてはならない。

この短い序にも見出されるが、ソntagの文章には「良心の表現」とか「道義的な仕事」という言葉遣いが多用されている。この序においても、《書く声と語る声の双方》の《「混濁した」あるいは「時宜に応じた」著述が、それでも、二つの異なる命題を遵守するという、私の作家としての良心にかなうものとなっていることを願う。二つの命題とは、私たちに共通している社会的な生活と関心事の重大なテーマのいくつかに、真摯に、思慮深く、関与すること。そして、そのような関与への誘いに対する、適切な、それも作家としてのわだかまりを伝えることだ。その意味で、真実を語るという作家の第一の責務にもとらない自分であったことを念じている。だが、真実はつねに複雑であり、矛盾に満ちている》と書かれているように、「真摯」とか「真実」、「責務」という言葉が見出される。

内田樹が言うように、確かに《私たちは知性を計量するとき、その人の「真剣さ」や「情報量」や「現場経験」などというものを勘定には入れない。》「知性」という言葉などをもち出さなくとも、「良心」とか「真剣さ」などという、人間の内にこもるような言葉を意識的に用いることによって、ソンググがなにを言いあらわそうとしているのか、が問題なのだ。問うに値することを彼女は言おうとしているのだろうか。彼女が殊更に「作家としての良心」とか「真実を語る」と言うとき、当然のこと以上のことを言おうとしているとみななければ、あるいは、そのような当然のことがいまや作家たちに置き去りにされていることを改めて彼女が指し示そうとしていると考えなければ、言葉として押し出すのが気恥ずかしく感じられるそれらの言葉に振り向くことはとても困難である。

ソンググにとって「なにごとかを書く」ことは、なによりも彼女自身にむかって「なにごとかを書く」ことにほかならなかった。悲惨なサラエヴォについて彼女が「なにごとかを書く」ことは、悲惨なサラエヴォが彼女にむかって「なにごとかを書く」ことでもあった。彼女はサラエヴォに足を踏み入れたとき、サラエヴォも彼女のなかに足を踏み入れたのである。サラエヴォでの『ゴドー』上演は、そのような「なにごとかを書く」ことであった。大江健三郎との往復書簡のなかで、《意見をもつことはたやすい、安易すぎる、という自覚がありました。たとえ正しい意見でもそうです》と述べていることは、戦争について「なにごとかを書く」ことは《たやすい、安易すぎる》ということであった。それが《たとえ正しい意見でもそうです》ということは、《たやすい、安易すぎる》ことにおいて、《正しい意見》を持ちうるということであった。

安全地帯においては《意見をもつことはたやすい、安易すぎる》し、《正しい意見》を吐くこともできる、と言い換えて問題を把握してみる。「安全地帯」とは、発される言葉が向かっている場所と言葉を発する場所との懸隔であり、前者と後者が全く交差しがない場所を指しているといつてよい。安全地帯で言える《正しい意見》を安全地帯ではない、その《正しい意見》が向かおうとしている危険な場所において同様に発することができるか。もし発しえないなら、そんな《正しい意見》はその危険な場所のなかではなんの意味があるのか。我々が真剣に考えなくてはならないのは、安全地帯において発される《正しい意見》ではなく、危険な場所のなかでのその《正しい意見》が彎曲しながら、一瞬ごとに全力を挙げて打ちださなくてはならない判断ではないのか。

ソンググは確かにそう言っているように聞こえる。「良心」とか「真剣」とか「真摯」という言葉を多発するそのなかに、問題の外に立って考えるのではなく、問題の中に踏み込んで考えようとしているソンググを見出さなければ、内田樹や加藤典洋のように、現場至上主義の度しがたいソンググしか見出せないだろう。彼女が大江健三郎との往復書簡のなかで語っている、《自分がそれまで知らなかったり、この目で見たことがなかったりする事柄については、けっしてどんな立場もってはならない》とか、《直接の体験の具体性》、《リアルなものの衝撃》、あるいは、《身をもって目撃すること、参加すること》とか、《真剣であるということは責任をとるといことです》とかの言葉や文

章などは、その文脈のなかではじめて読む者に 楔^{くさび}のように打ち込んでくるにちがいない。危険な場所のなかに身を置いて考えることによって、当然その考えも彎曲をしいられてとんでもないところに行きついてしまうかもしれない。いや、度々そうなりがちである。だからこそソングは、《でも、独善的にならずに正しくあるにはどうすべきか》について真剣に考えるし、我々も真摯に考えなくてはならないのだ。

《私は戦争について語りたくないし、なんらかの「立場」もとりにたくない。もちろん現場になんか頼まれたって行きたくないし、「戦闘にくみする」ことなんかまっぴらごめんである。／そんな人間は戦争について論じる資格がない、とソングとその同類たちが言うから、私は黙っているのである》（「古だぬきは戦争について語らない」）と述べる内田樹の底の浅さは、もちろん、自分の言葉がどんな安全な場所において発せられているかに対する無自覚からやってくる。加藤典洋も同様である。自分たちの言葉はなんでも語れることを無邪気に信じている傲慢さが、そこには感じ取れる。少なくともソングには彼らのような言葉に対する無条件の信頼はない。言葉を言葉において支えるにはあまりにも不十分であり、身において言葉を支えなくては言葉がいつでも宙吊りに晒されることをよく知っている。そこが彼らと全く異なっているから、ソングには彼らがよくみえても、彼らには彼女がいつまでたってもみえないのである。

危険な場所のなかで、《でも、独善的にならずに正しくあるにはどうすべきか》というソングの言葉が、どれほどの重さと深刻さをかかえるなかで発されていたのかが、いまその先に目を通すなかで改めて浮かび上がってくる。

《間違っていると知っていても、間違っていることをやってのける、人間のその能力にも私は驚いています》と書いて、こう続ける。

《アルゼンチンの海軍武官、アドルフォ・フランシスコ・シリngo少佐についてお聞きになったことがありますか。70年代後半の軍事独裁政権がとらえた政治囚の多くを、きわめて恐ろしい方法で処刑したことを数年前に告白した人物です。政治囚を海軍機で上空に連行し、飛行機から投げ落としたというのです（しかも、これは「軍の命令」の遂行だったと）。アルゼンチンのいわゆる汚れた戦争の最中の彼とその他の人々の所業を考えると身震いがします。

さらに脳裏を離れないのがシリngoの次の告白です。腕と胴体を縛り上げられ、しかも意識のしっかりしていた犠牲者たち 女も男も、青少年も老人もいたということで、南大西洋上の暗い空中に押し出そうという瞬間、彼はかつて見たナチスの死の強制収容所の写真をしばしば思い浮かべたと言います。

本人の言葉をそのまま読んでください。告白についての新聞記事からノートに書き写しておいたものです。

「自分がかかえていた精神的な問題は、彼らがかたまって、というか、整列していると、第二次世界大戦の写真そっくりに見えたことです」。

このようにシリngoは「精神的な問題」をかかえていました。あえて言えば彼にも苦

悩の瞬間があった。それでも彼は飛行機から政治囚を一人、また一人と投げ落としていったのです。

この話から私たちは、広島と長崎への原子爆弾投下を計画した人々、それを実行した人々、アウシュヴィッツや強制収容所を取り仕切っていた人々、南京大虐殺をおかした人々、カンボジアとルワンダで何百万人を殺害した人々、コソヴォであの大々的なひどい苦悩を作り出している人々について、何を考えるのでしょうか。》

この残虐非道な事例を取りだして、ソングはなにを言おうとしているのか。このシリゴの所業と、広島と長崎への原爆投下やアウシュヴィッツ等の大虐殺とが区別される必要があるのは、同じ実行者の「汚れた手」ではあっても、前者が自分の手で飛行機から投げ落とすという具体的な殺人行為であったのに対して、後者が大虐殺システムの中で各々の実行者の「汚れた手」が殺人行為に直結していることが見えにくく、抽象的であった点においてである。簡単にいえば、前者の実行者には殺人の意識が濃密であらざるをえなかったのに対して、後者の実行者には殺人の意識が希薄であった。したがって、罪責感も当然異なってくる。いいかえると、実行者たちの「汚れた手」は組織の手でもあったが、前者では自分の手を組織の手のなかに押し隠すことが困難であったのに対して、後者では自分の手を組織の手のなかに押し隠すことが容易であった。

この差異は罪責感の量からみれば、決定的な差異に感じられる。前者でのシリゴは自分が飛行機から空中に突き落とそうとするとき、《かつて見たナチスの死の強制収容所の写真をしばしば思い浮かべた》のに対して、おそらくカンボジアやルワンダ、コソヴォではアウシュヴィッツを思い浮かべる人々は皆無に近かったのではないか。ソングはシリゴの事例について、《間違っていると知っていても、間違っていることをやってのける、人間のその能力にも私は驚く、と言う。間違っていることを知っていることは、間違っていることに対する制止力にはならないということだ。ここで二つのことが考えられる。一つは、間違いを知っているかいないかにかかわらず、人間というものはつねに間違いを犯すということであり、もう一つは、間違っていると知っている、そのありかたに対する疑問であり、本当に《間違っていると知っていても、間違っていることをやってのける》ものなのかということである。

人間は一度間違いを知れば、二度と間違いを犯さない、と考えてきた。いや、人間は二度と同じ間違いを繰り返さないが、少しずつ異なった間違いを犯す、と考えることもあった。いずれにしても、人間は同じ間違いは繰り返さないと誓いながら、あるいは信じながら、歩いてきた。自分がいま行おうとしていることはアウシュヴィッツと変わらないのではないかとシリゴが一瞬思ったとしても、政治囚を空中へ突き落とす行為は止まらなかったのはなぜか。それははっきりしている。その行為が自分の任務だからだ。であるなら、自分の任務は間違っていると認識しなければならなかった。その認識はもちろん、その行為の任務を割り当てられる初めから、つまり、飛行機に乗る前から貫かれる必要があった。飛行機に搭乗してからでは遅かった。シリゴが飛行機の搭

乗前から自分の任務に疑問を抱いていたのかどうかはわからないが、突き落とす瞬間になって自分の行為のもつ意味を考えて、アウシュヴィッツが思い浮かんだのかもしれない。

シリngoにも《苦悩の瞬間があった》にもかかわらず、《彼は飛行機から政治囚を一人、また一人と投げ落としていった》とソクタグが言うのは、シリngoの苦悩が投げ落とされる政治囚たちの苦悩と遂に重なることがなかった、要するに、彼の苦悩は実を結ばず、ただそれだけのことであった、ということだろう。いや、人間は苦悩しながら残虐な行為をやってのける、ということかもしれない。任務に忠実であり、従順であったシリngoは、自分の苦悩にも忠実であり、従順であったと考えるべきかもしれない。残虐な行為を仕出かす人間がその残虐さにふさわしく、一片の苦悩すらも持ち合わせていないということではなく、どの人間にも訪れる「苦悩の瞬間」に直面していたという問題について、ソクタグは考えていたのだ。

間違っていると知ったならば、間違っていることをするな、ということではなければ、人間はいつまでも間違っていることをしつづけるだろう。そうならないのは、人間は現実の社会のなかで生きるためには間違っただけでもしなければならぬと教え込まれるし、自らもそのように学び取ってくるからだ。綺麗事では済まされない軍隊では尚更、間違っていることもやってのけなければならぬだろう。シリngoは厳格な規律と服従が要求される軍隊のなかで、少佐にまで昇りつめた海軍武官であった。そんな彼が任務として政治囚を空中へ突き落としていったときに「苦悩の瞬間」が訪れたということは、たとえその苦悩が政治囚たちに全くなんの影響を及ぼさなかったとしても、彼がその苦悩を引きずって生きてきただろうことを想像すると、やはり彼に訪れた「苦悩の瞬間」は絶望のなかの曙光なのではないか。それとも苦悩しながらも残虐な行為を止めないところに、人間の救いがたいおぞましさを覗き込まなければならぬのだろうか。

《独善的にならずに正しくあるにはどうすべきか》と考え、偏りの源泉である「私」の放棄に思い巡らし、《正しいことを防衛することは終わりのない責務です》と語るソクタグからすれば、少佐としての「自分」を放棄できるほどの苦悩の大きさに見舞われる必要があっただろうし、彼は空中に投げ落とした人々の生の重さに匹敵できる苦悩の塊を背負いつづけて生きるしかない、という思いであったかもしれない。《間違っていると知っていても、間違っていることをやってのける》ことについては、《間違っていることをやってのける》ことができる程度にしか、シリngoは《間違っていること》を知らなかったといえるかもしれない。

ソクタグという作家は、自分の発する言葉が向かう場所に必ず自らの身も置こうとし、自らの身を置かない場所に向かっては言葉を発することを控える、というような発想をどこから獲得してきたのだろう。『隠喩としての病い』という著作もあるように、彼女の命を奪った癌体験に基づいていることは間違いのないと思われる。おそらく彼女は自分が癌患者になって初めて、病者や病について溢れ返っている言説のほとんどが、《意見をもつことはたやすい、安易すぎる》ことを思い知らされたにちがいない。病に苦しん

でいる場所に立つなら、そんな安易な意見を発することはけっしてできなかつた。《たとえ正しい意見》だったとしても、その《正しい意見》は病に苦しむ患者にとってどんな意味を持つというのか。患者が欲しているのは《正しい意見》なぞではなく、その苦しみを共有してくれる言葉であり、存在ではないのか。《私がずいぶん前に自分に課したことがあります。自分がそれまで知らなかつたり、この目で見たことがなかつたりする事柄については、けっしてどんな立場もとってはならないと》と、大江健三郎との往復書簡のなかで語っていることは、彼女がヴェトナムやサラエヴォでの戦争に触れるなかに挟まれているから、内田樹や加藤典洋が曲解したがるように、戦場に行くか行かないかの問題として^{おとし} 貶められがちであるが、もしかすると癌体験によって《自分に課したことがあります》と読むべきなのかもしれない。自分が癌患者にならなければ、病いに不安を抱いたり、苦しむということが本当にはわからないままに、無自覚に病や患者に言葉で安易に触れようとしただろう、という思いがそこには込められていただろう。病に苦しめられるだけでなく、氾濫する言説にも苦しまなくてはならない患者の気持を味わうことによって、彼女はそのことをけっして忘れずに自分の終生の課題にしていたと推測される。

「直接の体験の具体性」という言葉は、癌に冒されて死に直面していた中から出てきたと受けとめることもできる。ソンググからすれば、個人が冒される癌は国家・社会の次元では戦争として捉えられた。したがって彼女にとっては、癌も戦争も同じ位相で取り扱うことができた。ただ彼女が体験した癌と戦争とでは、当然かかわりかたは異なつた。癌は彼女が抱え込んでしまったものではあつたが、戦争においてはヴェトナムでもサラエヴォでも彼女が「外」からかかわっていくかたちしか取ることができなかつた。もちろん、「外」から「内」へと入り込んでいくのだが、それでもその「内」は期間限定であり、戦時下の都市に住民としてずっと居住しつづけることにはならなかつた。彼女が《身をもって目撃すること、参加すること》と言つても、「存在する」とはけっして言わないのは、そのことにかかわっていたらうし、作家は《活動家であつてはならない》という彼女の考えからすれば、作家は「書く」人であつて、「存在する」人ではなかつたのだ。

自分の発する言葉が向かう場所に身も寄り添わねばならぬというソンググの発想は、けっして孤立してはいなかつた。60年代末の世界的な大学闘争の領域ではこの発想が吹き荒れたし、この発想においてこそ大学闘争が展開され、持続されてきたのである。たとえば、吉本隆明によって書かれた「情況への発言」と題された文章が彼の個人誌『試行』等に発表されるとき、確かにその文章はいま起つている闘争や問題の情況に突き入る内容を含んでいた。まさしく情況にむかつての発言にほかならなかつた。大学闘争以前ではそのような「情況への発言」も通用しえただろう。しかしながら、大学闘争を契機として出現した「情況への発言」は、情況に飛び込むのは発言だけでなく、発言主体も共にであつた。かつての「情況への発言」は大学闘争を潜ることによって《意見を

もつことはたやすい、安易すぎる》ということになってしまったのだ。大学闘争以降の「状況への発言」は、発言それ自体の状況性を必然的にかかえこまざるをえなくなってしまったのである。

逆にいえば、「発言への状況」を問うていく「状況への発言」において、大学闘争は新たな質の闘争として支えられてきたのだ。大学闘争に言及する吉本隆明の「状況への発言」は、発言する場所が全く状況性と切断されていたために、もはや「状況への発言」たりえなかった。《身をもって目撃すること、参加すること》がまさしく問われていたのに、言葉だけが流通する、どこにもない「状況への発言」にすぎなかったのだ。「状況への発言」それ自体が全く情况的でないのに、どうして「状況への発言」たりえるだろう。つまり、発言が状況性を帯びる度合いでしか、「状況への発言」であることはできなかったのである。大学闘争などとは全く無関係であっても、ソクタグは大学闘争の根底を共有することのできた作家であったし、また「状況への発言」などという文章を書かなくても、ソクタグの「直接の体験の具体性」に貫かれた文章はすべて、本質的な意味で「状況への発言」にほかならなかった。

繰り返すが、ソクタグは活動家ではなく、作家であり、「書く」人であった。「なにごとかを書く」ためには、つねに自分を含めなくてはならないし、自分を含めずに「なにごとかを書く」としても、なにも書いたことにはならないことに気づき、主張しつづけた作家であった。別の言葉でいえば、ソクタグを介して「書く」ことはようやく、「書く」ことの現場性を自覚するようになったのである。つまり、「書く」ことは新たな自体に出会うことになったのであり、それほどまでに「書く」ことは問い迫られてきたのだ。《意見をもつことはたやすい、安易すぎる》ということは、「書く」ことは「書く」ことの現場性からの問いの視線を浴びる契機を持たないことにおいて、そうであった。ある意味で頹廃であった。もちろん、「書く」ことのなかでなにかに出会えることを信じる書き手からすれば、内田樹や加藤典洋にみられるように、ソクタグのような作家の出現はどこかで自分たちの「書く」ことの根底を脅かしているのが感じられるが故に、たまらなく不快な存在として擲論する以外になんの術もなかったのだ。

ソクタグが言おうとしていることをメディアの問題として指摘しているのは、「自分を報道できないメディアの弱点」(『婦人公論』05.3.22)の斎藤美奈子である。今年の1月から2月にかけてスツタモンダしたNHK問題から入って、こう言う。

《そもそもは制作費の流用などの不正経理にはじまったこの事案は、NHKの番組に政治家の「圧力」があったと朝日新聞が報じた1月12日から新たなステージに突入した。一局の不祥事からNHK対朝日新聞というバトルへ。「不祥事」と「バトル」じゃ話がぜんぜんちがうんですね。

はっきりいって、朝日新聞に書かれたことで、NHKは得をしたんじゃないかと思う。経理問題に関しては弁明の余地なしだったNHKは、番組改変問題に関しては、朝日と対立することで、少なくとも「片方の雄」の立場に立てたわけですから。それまで攻撃

される一方だったのが、「朝日の報道は捏造だ」と逆に攻撃することでNHKは元気を取り戻した感すらある。興味深かったのは、民放各局が連日このニュースを大騒ぎで報じるなか、NHKだけが「NHKの番組改変問題を最小限にしか報じない」という事態が出現したことである。坊主憎けりゃ袈裟までで、審判が朝日新聞のロゴ入りシャツを着ているラグビーの試合を生中継しないと決めた（結果的には審判をアップにしないで放映した）なんて、まるで子どものケンカじゃん。》

次に、ホリエモンのライブドアがニッポン放送株を大量取得して、フジの乗っ取り騒動になった一件を取り上げる。

《NHK対朝日とはもちろん性質がちがうけれども、どこかで見たような構図がここでもやはり出現した。つまり、NHKを含む他局がこれをライブドア対フジという形で盛んに報じ、堀江社長が連日テレビに出まくるなか、フジだけが「ライブドア問題を最小限にしか報じない」という態度に出たのである。彼が出演していたバラエティ番組の放映を見送るなんぞ、ラグビーの中継に横槍を入れたNHKといい勝負。》

以上の直接的には関係のない二件から、《報道機関は自分が当事者になった事件の報道はしない（あるいはできない）という事実》を汲み取り、問題を摘出していく。

《渦中の人がかほんとはいちばん核心に近いネタをつかんでいるはずだし、現場にはジクジたる思いの社員もいるにちがいない、と考えればジャーナリズムの自己検証力に期待したくもなる。しかし、実際問題として、組織の論理は報道の自由に優先する。さっき「最小限にしか報じない」といったけれども、これは量のみならず「自社に都合のよい情報しか伝えない」という質の問題も含む。NHKを内部告発したディレクターの会見を、NHKが大きく扱うはずがない。同じく、経営権の争奪戦をめぐってニッポン放送とタッグを組んだフジが、敵対する堀江社長の立場を代弁するわけもない。

ひどい話だと思います？ しかし、ここには普遍的な原理がひそんでいるようにも思うのだ。病気になった外科医は自分で自分の手術はできないでしょ。罪を犯した弁護士は自分の弁護はできないし、批評家だって自分の作品の批評はできない。同様に「中立公正」を標榜する報道機関は自社の報道はできない。私の言葉でいえば「ハサミの値札の法則」だ。このあいだハサミを買って気がついたんだけど、ハサミについての値札の糸を切るには別のハサミがいるのである。この法則通り、海老沢氏の顔は民放で見たのだろうし、堀江氏の主張はフジテレビ以外で聞いたはずなんです、私たちは。

ま、それが確認できただけでもめっけもの。メディアに完全な中立はありえない。自社がからめば、それは必ず「大本営発表」に近づく。である以上、私たちはできるだけ多様なメディアを確保しておく必要があるし、ついでに言えば北朝鮮の国営放送も笑えないのである。》

外科医が自分の手術はできず、弁護士も自分の弁護はできず、批評家も自分の作品の批評はできず、報道機関も自社の報道はできない。ハサミだってそれについての値札の糸を切ることはできない。そのことは当然のように思えるかもしれないが、よく考えれ

ばおかしな話である。自分の手術ができない外科医に本当に他人の手術ができるのだろうか。同様に、自分の弁護ができない弁護士に他人の弁護ができるのだろうか。できる、と考えられている。自分の手術じゃないから他人の手術ができるのであり、自分の弁護じゃないから他人の弁護ができるのだ。そう考えられている。自分の作品の批評はできないから、他人の作品の批評ができるのだ。だが、自分の手術ができるから他人の手術もできるし、自分の弁護ができるから他人の弁護もできるのではないだろうか。自分の作品の批評もできない批評家にどうして他人の作品の批評ができるのだろうか。

人間というものは他人のことはよくみえるけれども、自分のことはみえないとか、自分と関係ない他人だからこそ手術もできるし、弁護もできるという通説に支配されている。その通説にしたがって社会のなかでの関係がまわっているようにみえる。確かに他人がよくみえるほどには自分のことがよくみえていない、ということをししばしば体験する。他人がよくみえることによって自分のこともよくみえるようになるのではなく、他人がよくみえることと自分に対する盲目性とが比例し、自分のことが全く見えなくなることの代償のように他人がますますよくみえるということは、自分と他人とが切断されていることを物語っており、自分と他人とは交換可能な存在であることを露ほども思っていないということだ。少なくともここでは、人の風見て我が風直せ という諺は通用しない。

自分が病気になるって初めて医者には患者の不安や絶望が手に取るようにみえてくるし、自分が被告人席に座ることになって初めて弁護士は自分の弁護を剥奪されている被告人の気持ちがひしひしと伝わってくるなら、そのときに外科医も弁護士も我が身のこととして他人の手術や弁護ができる契機に直面していることになる筈だ。それまでは自分と全く異なる他人の手術や弁護を行っていただけのことである。他人の手術や弁護が自分の手術や弁護でもあるようにして臨むということは、手術や弁護のなかに自分をたえず含ませることであり、自分を含む度合いだけ、手術や弁護が可能となるということであろう。しかし、自分を安全圏に立たせなければ、手術も弁護も、批評だってできないとみなされているし、実際問題としてNHKやフジのように、自分が絡めば歪みが生じてくるのであれば、我々の世界はすべて当事者以外の第三者の手で動いていることになるだろう。

現在進行中の三木谷社長の楽天によるTBSに対する経営統合案問題も含めて、NHKもフジもTBSも自社が問題に巻き込まれた場合、共に「問題を最小限にしか報じない」のは、無関係の場合に報道するスタンスしかメディアは持ってないからだ。斎藤美奈子が指摘するように、「組織の論理」を超える「報道の自由」をメディアは確立していないので、「自社に都合のよくない情報を伝えない」代わりに、「自社に都合のよい情報しか伝えない」ことも回避することによって、メディアは自社問題に対しては沈黙することになってしまうのである。《「中立公正」を標榜する報道機関は自社の報道はできない》ということに絡めていえば、その「中立公正」は自社報道に対する沈黙を抱える

ことによって成り立っていることを押さえておく必要があるだろう。

《メディアに完全な中立はありえない》と彼女は言うが、不完全な「中立公正」ということでもないだろう。《自社がからめば、それは必ず「大本営発表」に近づく》危険性を考えるなら、自社報道に対する沈黙は最上等の対応とみなせなくはないが、それでもメディアの「中立公正」というものは、自社報道の沈黙を大きく抱え込んだフィクションにすぎないことが露呈されている。このことは、メディアは自社報道という「組織の論理」に抵触しない安全圏での報道であることを物語っている。メディアといえども一企業にすぎない。自社がなくなってしまうと、報道どころか、元も子も無くなってしまおうということだ。では、メディアという「組織の論理」に支配されていない個人の「書き手」についてはどうか。確かに「組織の論理」に貫通されていなくとも、各々の「書き手」のなかにも、沈黙の安全圏が大きく巣くっていることを、ソクタグは「良心」とか「真剣」、「責任」という言葉を用いて指摘していたのではなかったか。

結局のところ、ソクタグも斎藤美奈子も、自らを当事者としめないメディアも書き手もダメではないか、と言っているのである。つまり、報道することも「書く」ことも、自らを当事者とする度合いにおいてしか始まらないのだ。《戦争について語りたくないし、なんらかの「立場」もとりたくない。もちろん現場になんか頼まれたって行きたくないし、「戦闘にくみする」ことなんかまっぴらごめん》と宣う内田樹にしても、加藤典洋にしても、戦争について語らなくともよいし、現場になんか行かなくてもよいから、自分たちが大学教師として立っている場所について沈黙することなく、そこを「書く」ことの現場たらしめればよいのだ。当事者性において「書く」ことをしなければ、その「書く」ことは大きな沈黙に貫通されていることを、「自分を報道できないメディアの弱点」は自分について「書く」ことのできない弱点として、明らかにしていたのである。

上野千鶴子が『『当事者学』の最高テキスト 『わたくしルポ』がはらむ戦慄』と題する文章（『週刊現代』05・11・12）で、中村うさぎの『女という病』について書いている。中村うさぎは《はずみで殺人犯になってしまったり、殺人事件の被害者になってしまった》13人の事件の《女たちを素材に、「何が彼女をそうさせたか」の謎に迫る》が、女たちに会いも取材もせず、《だれにも知られている報道や公判の記録》をもとに、《常識では考えられないような奇矯なふるまいや、極端な行動に走った「事件の女」の内面に遊行していく。もとより憶測に頼るしかない想像力の旅だ》として、その一例を挙げる。

幸福な母親が憎い、幸福な子どもが憎い、幸福な家族が憎い。夜叉^{やしや}にとって、「憎い」は「欲しい」と同義である。幸福な母親が欲しい、幸福な子どもが欲しい、幸福な家族が欲しい。欲しいから憎む、憎むから壊す。私の人生はいつもそうだった。あの男が欲しくて欲しくて、憎くて憎くて、徹底的に追い詰めてすべてを木^こ端^{ぼみじん}微塵に壊してしまった。あの男にあったかもしれない愛情さえ、私の憎悪で破壊した。私は夜叉だ、鬼子母神だ。誰も私を救えない。》

「保育園長園児殺害事件」について、「彼女は……」と三人称で書かれていたその文章が、途中から、切迫した調子で、「私は……」という一人称に入れ替わり、「加害者の女の独白の形式をとったこのたたみかけるような文章の衝迫のなかで、「私」とは、その女なのか、書き手自身なのか」という問いに対して、「彼女が私だ」と中村さんは言う。憑依する文体の「一人称」に思わず読み手もひきこまれ、「事件の女」のリアリティをわれ知らず経験させられてしまう。預かった子どもを虐待死させた保育園経営者の女は、子どものころ性的虐待を受けた経験があり、シングルマザーになって保育園を経営した後も風俗のアルバイトを続けていた。「昼間は『母』を職業とし、夜中は『女』を職業にする」……東電OLを連想しても不思議ではない。「女の自意識」は「病」だと言う中村さんの本書は、これまで「事件の女」の間に迫ったどの精神科医や心理学者の分析よりも説得力がある。読みながらわたしは、鳥肌が立つ思いをした。」

中村うさぎは、《自分の身体を実験場にして、エステや美容整形をくりかえしたことで知られている。なにしろ自分でそれを公言して、売り物にしているくらいだから。女の容貌へのこだわりをパフォーマンスにしてみせた、消費社会の新しいキャラクターである。整形美女であることを隠さない彼女は、整形のよさは「自分の顔が他人になること」つまり「自分の顔に責任を持たずにすむこと」だと喝破する。同じように、ポルノ作家の斎藤綾子も、「自分のボディをウェットスーツみたいに脱ぎ着したい」という欲望を語る。そこに魅力的なボディ（スーツ）を投げ出せば、それだけでもおもしろいように男が釣れる、ことを実感してのことだ。

女の「身体」も「容貌」も、女に属さない。つまり、「女の価値」は女に内在しない、それは「男の値踏み」によってつくられる、だからわたしはそれに責任がない……という「思想」を、これほどはっきりしたかたちで表現した女性がどれだけいたらうか。」

そんな中村うさぎと、《顔に生まれつき大きな赤アザがあり（単純性血管種という）、ユニークフェイスという顔に障害のある人たちの団体を主宰している》石井政之との対談集『自分の顔が許せない！』で、彼らは、容貌は「語られるべき価値のある問題だ」と考えつつも、対極に位置しているのを浮き彫りにする。

《顔というのは人体の部位のなかで不思議な位置にある。鏡を使わない限り自分には決して見えず、もっぱら他人に向けられている。異貌に反応するのは、他人であって自分ではない。人は他人の反応によって初めて、自分の容貌がどういうものであるかを知らされる。つまりその点で、容貌は、自分ではなく、他人に属している。暮らすということだけから考えれば、このふたりには、何の「障害」もない。他人の反応と、それに拘泥する自意識の病を除けば。

息詰まるやりとりは、しかし、ふたりのずれをきわだたせる結果になる。さまざまな困難と苦悩のあとに、石井さんは「この顔とともに、生きていこう」という受容の境地を語る。自分が、「アザの奴隷」ではなく、「アザの支配者」だというステージに立った、という。他方、中村さんは、美容整形したカラダは「自分のカラダではない」というし

かたで、自意識から切り離す。身体は加工できるし、アザも治療することも特殊メイクで隠すこともできる。他人の価値観にしたがって自分の身体を変形することで他人に従属することを石井さんは拒絶し、中村さんは自分の身体なぞ、他人にくれてやる。どちらの「地獄」が深いのか。この対照は、ジェンダーの差異と言ってよいだろうか？

「自分を報道できないメディアの弱点」とは、「自分の顔がみえない『私』の弱点」になるのだろうか。前者は「自分の報道に対するメディアの沈黙」にほかならないが、後者も「私」は自分の顔に対して沈黙しているのだろうか。もちろん、自分では見ることができないので、「私」はいつも自分の顔に対して沈黙している。しかし、その沈黙は「私」の顔を見ている他人によって打ち破られる。他人の反応を通じて、自分の顔が《どういうものであるかを知らされる》ことになるからだ。自分では見えない自分の顔を、「私」は他人を通じてしか知ることができないのである。つまり、他人は自分の顔を映しだしている鏡なのだ。「私」は他人の鏡に映しだされた自分の顔を自分の顔とする以外にないのである。《その点で、容貌は、自分ではなく、他人に属している》が、だが、他人に見えている顔がどこまでも自分の顔であることも間違いない。

自分の顔が他人に属しているなら、自分の顔がますます他人に属するように仕向けていく抵抗のかたちを取るのが中村うさぎであり、他方、他人にどのように見えようとも、そして自分にはいかに見えなくとも、自分の顔は自分の顔として抵抗するのが石井政之である。他人に気に入られるように自分の顔を整形する中村うさぎは、他人が受け入れているのは整形であって、整形によっても変わらない自分自身ではありえないことを自覚し、石井政之は他人に拒否反応を生じさせる自分の顔を、他人がそれぞれに隠し持っている暗渠あんきよが外に引きずりだされた形相として他人に対峙していたのだ。《異形は他者を困惑させ、ゆさぶり、境界を攪乱する。整形美人であることを公言する女性は、美の虚構性と客体性のからくりをあばく。このふたりはたったひとつの点で強烈な同意に達している……この わたし は、おまえに属さない、と。》上野千鶴子はこう締め括る。

大きな赤アザのある顔を敬遠して、整形した顔を気に入るのは、出来の悪い人形を敬遠して、出来の良い人形を愛玩するのと同じことだ。他人が人形を相手にしていることには変わりはない。だが、人形には生身の《この わたし 》は宿っていない。自分の身体を当事者性として彼らが生きているのが、上野千鶴子の文章によってよく伝わってくる。《身をもって目撃すること、参加すること》と語っていたソンググの言葉も改めて甦ってくる。現場にしても当事者性にしても、出かけて見つけるものではなく、自分が立っている「そこ」から立ち上がってくるものであり、作りだされるものであることが、二人の生き様からまざまざとみえてくる。まさに「身」そのものを現場とすることにおいて、当事者性を生きているというほかない。

2005年11月22日記